

ふるさと探訪【其の三十四】  
信夫山散歩（三）

福島市では、信夫山の自然公園化を進めています。最近では、遊歩道やフィールドアスレチックの環境を整えてきた成果もあり、近隣の小中学校の総合学習の絶好の材料となっています。地図を片手に生徒たちが、いろいろなることを調べに図書館へ来ます。信夫山の名前のいわれ、遺跡や記念碑、動植物の特徴、民話・伝説など、種々多様で、地域資料カウンターにおいては、「阿武隈川について」の調べ学習と合わせて、二大テーマとなっています。

昭和五十八（一九八三）年、森林文化協会と朝日新聞社が行った《二十世紀に残したい日本の自然百選》に、信夫山が選ばれました。国立公園など、すでに保全されているところを対象外としたので、身近な自然や破壊の恐れがある自然地が含まれました。信夫山は市民の憩いの場として、アカマツやナラ、クヌギなどの雑木林が高く評価されたのでした。

『信夫山のしおり』（平成十四年福島市編・発行）の植生によると、西部はコナラが目立つ紅葉樹林で、東部と尾根すじはアカマツに代表される針葉樹林となっています。この対比は、岩質の違いによるものだろうと推測されています。このような里山は人為の影響を大きく受けるのだそうですが、アカマツ ヤマツツジ群落が、自然本来のものとして尾根すじにみられます。また、中央部南側には暖温帯性のシラカシ

ヤブツバキ群落があり、この近くの柚子栽培とあわせて、中通り北部の気候の特性を示すものです。信夫山のユズは、北限の特産品として有名ですが、山の中腹が麓より暖かくなる、気象の特性を生かしたものと いえます。また、栽培されるようになった いわれについては、信夫山の神（羽黒山）が賊に追われたとき、トゲのある袖垣に身をひそめて難をさけたので、山上の家々ではイグネ（家の周囲の木）としたと伝えられています。

春には、カタクリやシヨウジヨウバカマの群生がみられ、全山には約二千本の桜が植えられています。しかし残念なことに、この二十年の間に約三十二種の植物が絶滅、または絶滅に瀕しているとの報告があります。私たちはこの警鐘を受け止めていかなければなりません。

鳥類については、約一〇〇種類の野鳥が観察されていたようですが（日本国内には約五二〇種類、福島県内には約半分の二五〇種が確認されている）、近年の温暖化・異常気象・環境の変化により、観察されなくなった野鳥も目立ってきているそうです。夏に渡ってきていたコサメビタキ、クロツグミ、サンコウチヨウ、アカモズ、チゴモズ、サンシヨウクイ、コルリ、コマドリなどは完全に姿を消してしまっただといわれま す。ウグイスも一時は十四つがいの生息を確認できたといわれますが、現在は四つがいに減ったといわれています。原因としては、ウグイスが繁殖できる藪が刈り払われたことを上げています。それから、平成十四年三月の山火事による伐採の影響を受けたことも心配され、回復には時間がかかりそうです。

最後に、今年は戦後六十周年ということで、終戦直前に信夫山の西側に掘られた、地下工場のことを知ってほしいと思います。昭和二十年二月、戦闘機を製造していた群馬県の中島飛行機武蔵野工場が疎開してきて、エンジン部門の工場を、信夫山に建設したという事実です。しかし五ヶ月で敗戦となり、生産されたのはごく僅かでしたが、五千坪の地下工場が予定されていたというのです。この件に関する資料は、なぜかほとんどなかったのですが、福島高等学校歴史部が、機関誌『浜田町界わら』第五・六合併号と第九号（平成四・七年）に、綿密な調査記録と証言集を発表しています。それを手がかりに資料を探していくと、福島高校の記念誌などによれば、当時生徒たちも勤労動員させられ、朝鮮人労働者たちと働いた記録が出てきます。

このように、市民の憩いの御山は、風化しつつある戦争の歴史をも語り、身近に豊かな自然を楽しませてくれる場なのです。これからも、その環境を大切に守っていき たいものです。

【文中で紹介した以外の参考文献】

- \* 『福島の山野草』 穂積正著 1995 \*
- \* 『雑草の賦』 八巻敏男著 1992 \*
- \* 『ト ラジ』 大塚一二著 1992 \*
- \* 『信夫山散歩』 『ハイキング編』 魅力ある福島をめざす会 編 2003 \*
- \* 『福島の朝鮮人強制連行真相調査の記録』 朝鮮人強制連行福島県真相調査団日本人側・朝鮮人側調査団編・著 1993 \*
- \* 『福島の二〇世紀』 ややまひろし著 1998 \*
- \* 『地下秘密工場』 齊藤勉著のんぶる舎 1990

（地域資料チーム 菅野由美）